

研究開発完了報告

文部科学省初等中等教育局長 殿

住 所 愛知県名古屋市中白区塩釜口一丁目 501 番地
 管理機関名 学校法人名城大学
 代表者名 理事長 立花 貞司

平成 30 年度スーパーグローバルハイスクールにかかる研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成 30 年 4 月 2 日（契約締結日）～平成 31 年 3 月 29 日

2 指定校名

学校名 名城大学附属高等学校
 学校長名 岩崎 政次

3 研究開発名

高大協働による愛知県産業を基盤にしたグローバルビジネス課題の探究

4 研究開発概要

愛知県産業に根差したビジネス課題を軸に、「共生」、「協働」、「海外への発信・展開」、「国際貢献・社会貢献」の観点から、高大・産学で連携した探究活動を実施する。また、「総合的な学習の時間」と学校設定科目、課外活動を融合させたサービスラーニングを通じて課題研究を行い、スキルとマインドセットの育成、グローバルシチズンシップの獲得を目指す。

大学・他指定校等を招聘して「Meijo Global Festa」を開催し、SGH 事業の普及を行う。

学習評価には、パフォーマンス評価を用いる。スキルとマインドセットの変容等についてはアンケートを用いて検証する。

5 管理機関の取り組み・支援実績

5 (1) 実施日程

業 務 項 目	実 施 日 程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1 授業における連携												→
2 研究発表会における連携				▶▶		▶	▶	▶▶			▶	
3 グローバルサロンにおける連携											→	
4 グローバルリーダー講座における連携			▶					▶				
5 グローバルパスポートにおける連携												→
6 SGH 運営指導委員会の開催								▶			▶	
7 海外研修における連携												→

5 (2) 実績の説明（主対象生徒：87名，準対象生徒522名）

5 (2) -1 授業における連携

国際クラス第2学年（23名）「総合的学習の時間：課題探究」，一般進学クラス文系（127名）「グローバル概論」にて，授業実施（計4回）。その他，海外研修事前学習等において助言。

5 (2) -2 研究発表会における連携

「Meijo Global Festa 2018」をはじめとする計7回の研究発表会に対する助言・講評・運営。

5 (2) -3 グローバルサロンにおける連携

全校生徒を対象に自由参加で行う全9回の講座の支援。

5 (2) -4 グローバルリーダー講座における連携

全校生徒を対象に行う全2回の講座の支援。

5 (2) -5 グローバルパスポートにおける連携

運用状況の共有及び制度の連携方法について協議。

5 (2) -6 SGH 運営指導委員会の開催

11月，2月に2回開催。

5 (2) -7 海外研修における連携

海外研修における提携校やフィールドワーク先の紹介，学習内容等に関する助言。

6 研究開発の実績

6 (1) 実施日程

業 務 項 目	実 施 日 程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1 事業の評価												→
2 探究学習に関わる授業												→
3 海外研修							▶				▶	▶
4 ローカルフィールドワーク								▶				→
5 MeijoGlobal Festa								▶				→
6 グローバルパスポート												→
7 グローバルサロン										→		
8 グローバルリーダー講座			▶					▶				
9 SGH 運営指導委員会等の開催								▶			▶	
10 成果の公表・普及												→

6 (2) 実績の説明

6 (2) -1 事業の評価

グローバルシチズンシップの獲得に有効であると考える5つのスキルと5つのマインドセット（以下，5S5M）を中心に，各因子における生徒の変容等をもって事業を評価。

5つのスキル（5S）

- ①論理的・批判的思考力【思考力】
- ②ICT活用能力【ICT】
- ③コミュニケーション力・コラボレーション力【コミュ・コラボ】
- ④行動力・発信力【行動・発信】
- ⑤課題発見力・課題解決力【発見・解決】

5つのマインドセット（5M）

- ①アイデンティティを確立する意欲を持つ【ID】
- ②多様性を認め共感する気持ちを持つ【多様性】
- ③批判・摩擦・失敗を恐れない【失敗耐性】
- ④変化に対応する意欲を持つ【変化への対応】
- ⑤リーダーシップを発揮する意欲を持つ【リーダーシップ】

*以下の図表等において各因子の名称は，カッコ【】内のように省略して表記した。

対象生徒を対象とした本年度の調査：

- ①スーパーグローバルテスト（以下、SGT。5S5M等の各因子における到達度調査）：5段階の順序尺度
- ②5S5M等の各因子における向上実感調査：5段階の順序尺度
- ③②で向上実感を高めた要因調査：10項目の選択肢からの複数選択
- ④5S5M各因子における目標設定の変更状況と理由：3段階の順序尺度と記述
- ⑤次年度の活動意欲調査：3段階の順序尺度
- ⑥5S5M、アクションプランをもとにしたリフレクションシート：記述

6 (2) -2 探究学習に関わる授業

国際クラス第1学年（34名）総合的な学習の時間における「多文化共生」（2単位）
 国際クラス第2学年（23名）総合的な学習の時間における「課題探究」（2単位）
 国際クラス第3学年（30名）総合的な学習の時間における「課題探究」（4単位）
 一般進学クラス第1学年（370名）総合的な学習の時間における「探究基礎」（1単位）
 一般進学クラス文系第2学年（127名）総合的な学習の時間における「グローバル概論」（2単位）
 一般進学クラス文系第3学年選択者（25名）総合的な学習の時間における「課題探究」（2単位）

6 (2) -3 海外研修

国際クラス第1学年：グローバルレクチャー（ニュージーランド）3月実施：34名
 国際クラス第2学年：グローバルフィールドワーク（台湾）10月実施：14名
 国際クラス第2学年：グローバルフィールドワーク（インドネシア）10月実施：9名
 グローバルサロン参加者より選抜：グローバルアクション（カナダ）1月実施：6名

表 5年間の海外研修

	1 年目	2 年目	3 年目	4 年目	5 年目
グローバル レクチャー	インドネシア・バリ	インドネシア・バリ	ニュージーランド・ウェリントン		
	第 1 学年全員	第 1 学年選抜	第 1 学年全員		
グローバル フィールド ワーク	ニュージーランド・ホロフェヌア		ニュージーランド ウェリントン	インドネシア・バリ	
	第 2 学年全員			第 2 学年選択制	
			台湾・台中	台湾・台中	
			第 2 学年選抜	第 2 学年選択制	
グローバル アクション	アメリカ・サンディエゴ		台湾・台中	カナダ・トロント	
	SGH 対象生徒から選抜				

海外研修の成果検証の1つとして海外研修が各因子の向上実感に影響を与えた割合を調査したところ、特に第2学年において高い結果が出た（図1）。10月に海外研修を終えたところである第2学年の方がより強くその影響を感じていることがわかる。しかし、両学年とも探究活動や進路選択において重要な要素となっていることがうかがえる。

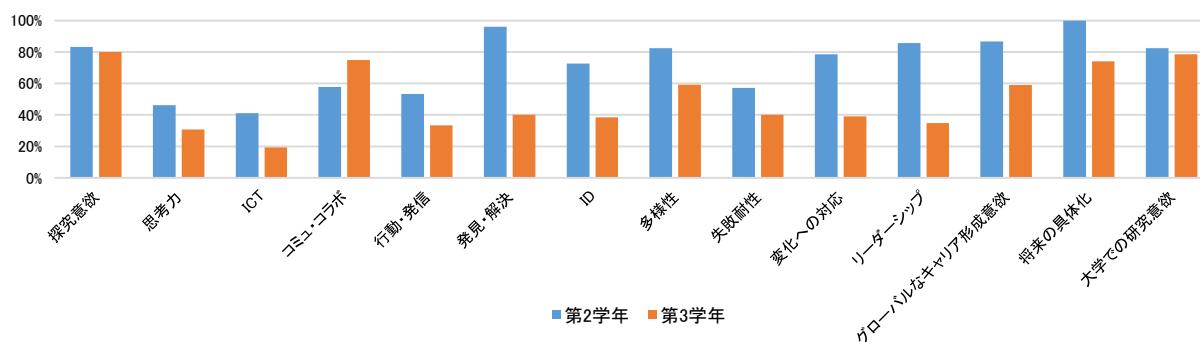


図1 海外研修が各因子の向上実感に影響を与えた割合

6 (2) -4 ローカルフィールドワーク

国際クラス第1学年：10回（南山大学人類学博物館・JICA 中部・株式会社ユニクロ・名古屋市内）

国際クラス第2学年：ゼミ別課題研究フィールドワーク 62か所

一般進学クラス文系第2学年：3回（南山大学人類学博物館・JICA 中部・立命館アジア太平洋大学）

一般進学クラス文系第3学年：ゼミ別課題研究フィールドワーク 4か所

表 5年間のローカルフィールドワーク

	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目
受け入れ企業・団体数	不明	33箇所	54箇所	68箇所	76箇所

6 (2) -5 Meijo Global Festa

東海地区の高校生を対象にフォーラム部門、口頭発表部門の開催・実施。

11月11日（日）9：30～17：00実施（参加校16校、参加人数合計のべ189名）

フォーラム部門173名／口頭発表部門（フォーラム成果発表7件34名・研究発表11件23名）

フォーラム部門：参加校15校・参加生徒166名（昨年度 参加校9校・参加生徒108名）

分科会 A 「Is More Immigration Good or Bad for Japan? 」

講師：名城大学。法学部准教授 David Green 氏

分科会 B 「グローバル・タックス（国際連帯税）の実施に向けて」

講師：名城大学法学部教授 伊川正樹氏

分科会 C 「新興国の通貨安からグローバル化を考える」

講師：名城大学経済学部准教授 新井大輔氏

分科会 D 「相模原障害者施設殺傷事件と杉田水脈議員の LGBT に関する発言に通底するもの」

講師：名城大学経営学部教授 村松恵子氏

分科会 E 「高校生が考える適切なスマホ利用」

講師：名城大学都市情報学部准教授 杉浦伸氏

分科会 F 「名古屋城天守閣木造復元をこのまま進めるべきか、そうでないならどうするか？」

講師：名城大学人間学部教授 伊藤俊一氏・水尾衣里氏・笠井尚氏・原田知佳氏

分科会 G 「ベストセラーとなった自己啓発本は読みに値するか」

講師：名城大学外国語学部准教授 堅田義明氏

口頭発表部門：参加校6校・発表11件（昨年度 参加校6校・発表9件）＊フォーラム成果発表を除く

講 評：名城大学経済学部教授 渋井康弘氏及びフォーラム部門講師

本校からの発表：

国際クラス第1学年グループ発表「生徒主体で作る多文化共生劇～『あいち多文化共生推進プラン2022』のその先～」

国際クラス第2学年グループ発表「台湾におけるニトリの販売戦略と顧客イメージ」

国際クラス第3学年個人発表 “Better Community Activities for Better Multicultural Society”

国際クラス第3学年個人発表 “Spread of Fair Trade in Japan”

国際クラス第3学年個人発表 “‘Education of Sexual Diversity’ into Compulsory Education”

表 5年間のMeijo Global Festa

	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目
名 称	SGH プレミーティング	SGH ミーティング	Meijo Global Festa		
内 容	グループワーク 成果発表	ディスカッション 成果発表	ディスカッション ポスター発表 成果発表・研究発表 SGH カンファレンス	ディスカッション 成果発表・研究発表	
ファシリテーター 講師 助言者	6 名古屋大学大学院生 国際基督教大学学生 立命館大学学生	11 名城大学教員・研究員 企業	8 名城大学教員	10 名城大学教員	12 名城大学教員
参加校数	1	8	9 (カンファレンス16)	12	16
参加者数	35	107	145 (実96)	142 (実124)	189 (実173)

6 (2) -6 グローバルパスポート

SGH の諸活動の記録と活動意欲を喚起する一手法として導入。「本校事業」、「プレゼンテーション」、「フィールドワーク」、「学外事業（イベント・研修）」、「学外大会・コンテスト」、「資格試験」の6項目の取り組み状況をマイル化して記録。



【グローバルパスポート概要】

- 1 対象生徒 国際クラス在籍者及び一般進学クラス文系第2学年、第3学年、グローバルサロン参加者
- 2 対象項目・マイル数 (目標マイル 1年修了時 2000, 2年修了時 3150, 3年修了時 4250)
 - (1) 本校事業への参加 (年間目標マイル 500)
 - グローバルサロン (参加 50 マイル)
 - 高大連携講座・ミーティング・フェスタ (参加 50 マイル) ※運営の場合は+50 マイル
 - 指定の名城大学主催のイベント (参加 50 マイル)
 - 海外研修 (参加 100 マイル)
 - (2) 本校プレゼンテーション (年間目標マイル 500)
 - 担当教諭の認めるプレゼンテーションの実施 (1回 50 マイル) ※選抜された場合は+50 マイル
 - (3) 本校フィールドワーク
 - 担当教諭の認めるフィールドワーク (1回 50 マイル)
 - 担当教諭の認める海外研修中のフィールドワーク (1回 50 マイル)
 - (4) 学外事業 (イベント・研修) への参加 (年間目標マイル 500)
 - 指定の学外イベント (1回 50 マイル)
 - 指定の学外研修 (1回 50 マイル)
 - (5) 学外大会・コンテスト (年間目標マイル 300)
 - 指定の大会・コンテストへの作品 (論文・作文・作品等) 応募 (1回 50 マイル) ※入賞等の場合は+100 マイル
 - 指定の大会・コンテストへの出場 (プレゼンテーション等) (1回 50 マイル) ※入賞等の場合は+100 マイル
 - (6) 取得英語資格 (目標マイル 1年修了時 550 2年修了時 1000 3年修了時 2100)

マイル	英検
1000	1級
800	準1級
350	2級
150	準2級

マイル	TOEIC L&R
1000	945-990
500	830-940
300	730-825
200	650-725
150	550-645
100	470-545
50	380-465

マイル	GTEC・CBT	IELTS	TOEFL iBT
1000	1400	7.0-	95-120
800	1250-1399	5.5-6.5	72-94
350	1000-1249	4.0-5.0	42-71
150	700-999	3.0	

本年度の目標マイルの達成率としては、国際クラス全学年とも 100%であった (昨年度の結果は第1学年 91.3%, 第2学年 93.8%, 第3学年 100%)。

第1学年、第2学年においては年を追うごとに獲得マイルが伸びており、早い段階から諸活動に参加したり、英語の資格試験に挑戦したりする成果が見られる。第3学年においては、昨年度よりも平均マイルが低くなっているが、これは英語の資格試験で昨年ほどの結果が出なかったことが原因である。資格試験については課題であるが、その他の諸活動については昨年度以上にマイルを獲得しており、目標値も大きく超えることができた (図1)。

今後ともこの流れを維持できるよう、3年間を見通した活動計画の周知を徹底する。

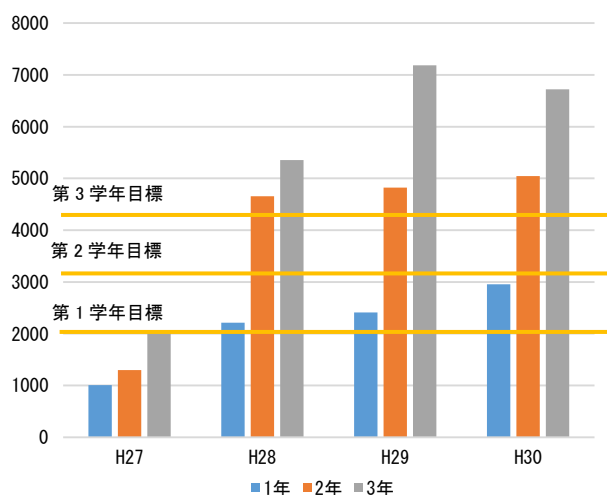


図1 年度毎の平均獲得マイルの推移(国際クラス)

6 (2) -7 グローバルサロン

全校生徒を対象に自由参加方式で実施。(土曜日 10:00~12:00)

計 9 回実施・参加人数合計 541 名。(国際 375 名, 一般進学文系 5 名, その他 161 名)

回	日 時	講 師 ・ テ ー マ
1	4 月 21 日	牧野佳奈子氏 (DiVE.tv 代表・制作ディレクター) 「愛知県の外国人労働者の日本語学習」
2	5 月 19 日	山藤旅聞氏 (都立武蔵高等学校教諭・SDGs ファシリテーター) 「SDGs を「知る」から「行動する」ためのデザイン～自分の好きで社会課題の解決を目指す方法～」
3	6 月 16 日	杉藤貴浩氏 (中日新聞社社会部記者) 「子どもの貧困」
4	7 月 7 日	菅谷亮介氏 (Very50 代表) 「世界に羽ばたく高校生が知るべき 3 つのこと」
5	9 月 29 日	杉浦伸氏 (名城大学都市情報学部准教授) 「『意思決定手法』を使ってみよう」
6	10 月 20 日	馬場幸子氏 (トヨタ自動車 (株)・北京オリンピックソフトボール金メダリスト) 「夢に向かう～瞬間 (いま) しかない」
7	11 月 10 日	四方善啓氏 (名古屋大学名誉教授) 「インドから西へと流れる学問」
8	12 月 8 日	Jeffery Fritch 氏 (Berlitz 講師・本校非常勤講師) 「Speaking with Confidence」
9	1 月 26 日	田林信哉氏 (総務省職員・元南相馬副市長) 「東日本大震災と原子力発電所の事故, そして復興について～南相馬市の経験から～」

6 (2) -8 グローバルリーダー講座

1 学期と 2 学期にそれぞれ 1 度, 全校生徒を対象に実施する。

回	日 時	講 師 ・ テ ー マ
1	6 月 20 日 (水)	小出宣昭氏 (中日新聞社顧問・主筆) 「モノサシー本主義を抜け出せ」
2	11 月 21 日 (水)	吉野彰氏 (名城大学理工学研究科教授) 「リチウムイオン電池が拓く未来の社会」

6 (2) -9 SGH 運営指導委員会等の開催

回	日 時	審 議 ・ 報 告 事 項
1	11 月 11 日 (日)	- SGH 運営指導委員会委員長の選出 - 愛知県庁×名城高校♪多文化共生セッションの報告 - グローバルフィールドワーク (台湾・インドネシア研修) の報告 - Meijo Global Festa 2018 - 今後の事業展開
2	2 月 22 日 (金)	- グローバルアクション (カナダ研修) の報告 - 第 4 回高校生国際シンポジウム報告 - 今後の事業展開

6 (2) -10 成果の公表・普及

・研究発表会の開催 (一般公開): 7 回 (その中での発表件数: 計 103 件)

① 国際クラス第 3 学年課題研究発表会 (日本語): 平成 30 年 7 月 2 日 (月)

内 容: 日本語での研究発表

発 表: 国際クラス第 3 学年 29 件 (29 名)

② SGH 探究活動に関する研究会: 平成 30 年 7 月 7 日 (土) 参加 9 校/36 名

内 容: Meijo Global Festa と探究活動についての講演・報告・研究協議

講 演: 「Meijo Global Festa に見る探究型学習の成果と課題」名城大学都市情報学部准教授 杉浦伸氏

報 告: 「Meijo Global Festa が目指すこと」教育開発部 中條健太

事例報告: 「国際クラスにおける探究型学習の実践」教育開発副部長 羽石優子

- ③ 国際クラス第1学年「愛知県庁×名城高校♪多文化共生セッション」発表：平成30年11月13日（火）
内 容：愛知県多文化共生推進室と連携して、多文化共生の取り組みを提案
発 表：国際クラス第1学年10件（34名）
- ④ 国際クラス第3学年課題研究発表会（英語）：平成30年11月1日（木）
内 容：英語での研究発表
発 表：国際クラス第3学年30件（30名）
- ⑤ Meijo Global Festa 2018：平成30年11月11日（日） 参加16校／223名
内 容：東海地区を中心とした課題研究に取り組む学校（生徒）による議論・発表
（詳細は前述「6（2）-5 Meijo Global Festa」p.7を参照）
- ⑥ 教育研究会 2018：平成30年11月22日（木） 参加40団体／102校
内 容：各教科におけるアクティブ・ラーニング型授業の公開授業と研究協議
公開授業：各教科（英語・数学・国語・理科・社会）2単位ずつ
- ⑦ 生徒研究発表会：平成31年2月22日（金）
内 容：全校より選抜で研究発表
口頭発表：SGH インドネシア研修調査報告1件（第2学年1名）
国際クラス第3学年課題研究2件（2名）／一般進学クラス文系第3学年1件（1名）
ポスター発表：国際クラス第3学年6件（6名）／国際クラス第2学年5件（5名）
グローバルサロン参加者有志1件（2名）
SGH カナダ研修調査報告1件（6名）

・外部研究発表会への参加9回（その中での発表等件数：計23件）

- ① 移民政策学会 2018 年度年次大会：平成30年5月27日（日）
内 容：講演・シンポジウム・自由報告・国際セッション・社会連携セッション
発 表：国際クラス第3学年3件（3名）
・『「新あいち多文化共生推進プラン」への提案』
・「愛知県におけるより良い多文化社会に向けた効果的な取り組みの提案」
・「外国人集住団地における持続可能なコミュニティの実現への一方策」
- ② Global Link Singapore 2018：平成30年7月20日（金）～22日（日）
内 容：アジア太平洋における中高生のアイデアコンテスト（社会課題分野）
発 表：国際クラス第3学年1件（1名）
“Better Community Activities for a Better Multicultural Society”
- ③ グローバル人材育成教育学会 第6回全国大会：平成30年10月20日（土）・21日（日）
内 容：講演・シンポジウム・事例紹介・ポスター発表
・シンポジウム「産学・高大接続連携からみるグローバル人材育成」：校長 岩崎政次
・シンポジウム「高大連携の理想モデルを探る」：教育開発部 伊藤高司
・シンポジウム「学生たちが考えるグローバル化」：本校生徒
・事例紹介「高等学校におけるグローバル人材育成の取り組み」：教育開発副部長 羽石優子・国際クラス第3学年3名
・ポスター発表：国際クラス第3学年1件（1名）
- ④ SGH 全国高校生フォーラム：平成30年12月15日（土）
内 容：SGH 指定校生徒による課題研究のポスター発表
ポスター発表：国際クラス第3学年1件（1名）
“‘Education of Sexual Diversity’ into Compulsory Education”
- ⑤ 第4回高校生国際シンポジウム：平成31年2月8日（金）・9日（土）
内 容：課題研究に取り組む国内外の高校生による研究発表コンテスト
口頭発表：国際クラス第2学年1件（1名）：スライド発表部門優良賞
「観光戦略における名古屋城木造復元の有効性～バリの観光開発の事例から～」
ポスター発表：国際クラス第2学年5件（5名）
「避難所 HUG の学校教育への導入」：ポスター発表部門最優秀賞 他

- ⑥ 課題研究セミナー：平成 31 年 2 月 16 日（土）
内 容：課題研究に関する講演会（主催：新興出版社啓林館）
講 演：教育開発部 山口照由「課題研究 - 全校への普及 -」
- ⑦ 東海地区高校数学セミナー：平成 31 年 3 月 3 日（日）
内 容：新テストに向けて今後求められる数学指導に関する講演会（主催：新興出版社啓林館）
講 演：教務部 宮田隆徳「反転授業とアクティブ・ラーニング」
- ⑧ NEXT Education セミナー 2019：平成 31 年 3 月 16 日（土）
内 容：『探究』はこれからの教育をどう変えるかに関する講演会（主催：株式会社 JTB）
講 演：教育開発副部長 羽石優子「探究活動をどう評価してきたか〜育てたい生徒像の実現に向けて〜」
- ⑨ SGH 甲子園：平成 31 年 3 月 23 日（土）
内 容：全国 SGH 課題研究発表
ポスター発表：国際クラス第 2 学年 1 名／ディスカッション：国際クラス第 2 学年 2 名

・他校との交流・連絡・普及

他指定校・アソシエイト校の研究発表会を参観：11 校

学会・他指定校・アソシエイト校との合同学習・研究発表会：7 回

本校主催の教員向け研究会：2 回

7 目標の進捗状況，成果，評価

7 (1) 【研究開発目標①】グローバルリーダー養成のための各種プログラムを「グローバルパスポート」制度において 25 件以上実施する。

本校事業としては，海外研修や研究発表会，講座等，32 件実施し，目標を達成できた。

表 5 年間のグローバルパスポートにおける本校プログラムの件数

指 標	指定前	1 年目	2 年目	3 年目	4 年目	5 年目	目標
本校プログラム	0	18	29	48	30	32	25

*4 年目からは，「授業内での大学教授等による講座」を除いて計上

本校事業への各種プログラムへの参加状況は以下の通りである。

国際クラス第 1 学年（34 名）：延べ 523 名，平均約 15 回（昨年約 8 回）

国際クラス第 2 学年（23 名）：延べ 301 名，平均約 13 回（昨年約 9 回）

国際クラス第 3 学年（30 名）：延べ 257 名，平均 9 回（昨年約 3 回）

プログラムの策定が定着したとともに，教員・生徒たちにも周知されており，担任の声かけ等によって，生徒たちのなかにも積極的に参加するのが当たり前という機運が高まっている。

7 (2) 【研究開発目標②】PBL におけるコンフリクト・レゾリューション，ジグソー学習，フリップトクラスルームの各教科における展開例の開発と定着を進める。

本年度は，「SGH 探究活動に関する研究会」，「教育研究会 2018」を開催した。「SGH 探究活動に関する研究会」は，Meijo Global Festa と探究活動の成果検証を趣旨に 9 校 36 名が参加して実践報告や研究協議を行った。「教育研究会 2018」は SSH や SGH での探究活動での経験をいかしながら，通常の授業での「主体的・対話的で深い学び」につなげられるようなアクティブ・ラーニング型授業の実践研究を趣旨としており 40 団体 102 名（助言者 5 名を含む）の参加の下，英語，数学，国語，理科，地歴・公民で 2 単位ずつの公開授業見学と研究協議を行った。また，東海地区高校数学セミナーにて反転授業とアクティブ・ラーニングについて報告した。

7 (3) 【実践目標①】探究型学習を通して，自らネットワークを構築し，協働して問題解決に向かう，スキルとマインドセットを育成する。

本年度の探究型授業は，国際クラスでは第 1 学年で「多文化共生」（2 単位），第 2 学年では「国際教養」（4 単位）や「課題探究」（2 単位），第 3 学年では「国際教養」（2 単位）と「課題

探究」(4単位)を行った。そこに連動して、海外研修やフィールドワークが実施される。さらに、国語、数学、公民、英語等においても探究型の授業を積極的に実施している。

これらの探究学習の効果を検証するために、SGT 及び各因子の向上実感調査等を行った。

SGT の結果、国際クラスにおいては、入学時から各因子とも高く、各因子の値は、3.4～4.5 (一般進学クラスは 3.4～3.7) である。各因子の平均値もどの学年も向上している(右表)ことから、国際クラスで実施している探究型学習は、着実に成果を挙げているといえる。

以下に国際クラスの SGT 結果を分析する。

【主対象生：国際クラス第1学年】

- ① 本年度1月時点で、11因子中7因子が4.0を超え、全ての因子の平均は4.1ポイントである。4月の結果から0.3ポイント向上している。
- ② 4月の結果と比較して t 検定を行うと、「ICT (+0.7)」「発見・解決 (+0.6)」で有意差が認められた ($p < .05$)。これは情報教科と連携したグローバル教科「グローバルプロジェクトスタディ」と総合的な学習の時間「多文化共生」の成果だと考えられる。

【主対象生：国際クラス第2学年】

- ① 本年度1月の各因子の平均は4.0ポイントであった。昨年度の1月からほとんど変化はなく、有意差のある因子はなかった。わずかに「多様性 (+0.3)」に差異が見られたが、今後の変化を注視する。
- ② 入学時から比較すると、平均して0.2ポイント向上しており、「行動・発信」以外の全ての因子で向上している。有意差が認められたのは「ICT (+0.6)」の因子であり ($p < .05$)、新たに始まった「課題探究」の授業や校外での発表活動が増えていることが背景にあると考える。

【主対象生：国際クラス第3学年】

- ① 本年度1月の各因子の平均は4.2ポイントであった。また、昨年度1月から「行動・発信」「ID」以外の9因子でポイントが向上しており、 t 検定で、「思考力 (+0.1)」、「ICT (+0.2)」、「発見・解決 (+0.2)」、「失敗耐性 (+0.1)」において有意差が認められた ($p < .05$)。
- ② 入学時から平均して0.3ポイント向上し、「思考力 (+0.6)」「ICT (+0.7)」「発見・解決 (+0.4)」「失敗耐性 (+0.4)」に有意差が見られた ($p < .05$)。課題探究やそれに付随する国内外での活動等、探究活動の取り組みの成果といえる。

表 SGT の各因子の平均ポイント

クラス	1 年春	1 年冬	2 年冬	3 年冬
国際クラス第 1 学年	3.8	4.1		
国際クラス第 2 学年	3.8	4.0	4.0	
国際クラス第 3 学年	3.8	3.8	4.0	4.2
一般クラス第 1 学年	3.6	3.7		
一般クラス文系第 2 学年	3.8	3.7	3.5	
一般クラス文系第 3 学年	3.5	3.6	3.6	3.4

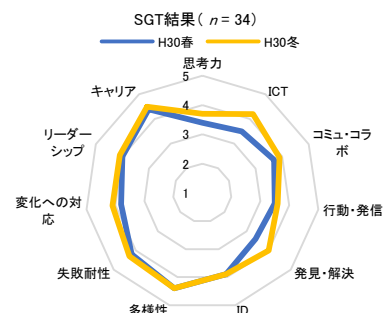


図1 国際クラス第1学年各因子の変化

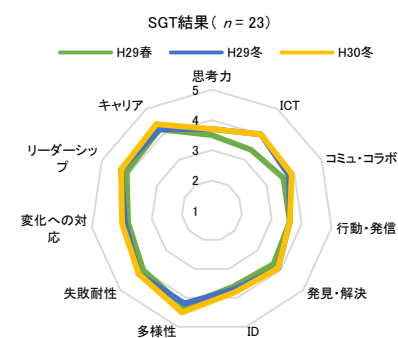


図2 国際クラス第2学年各因子の変化

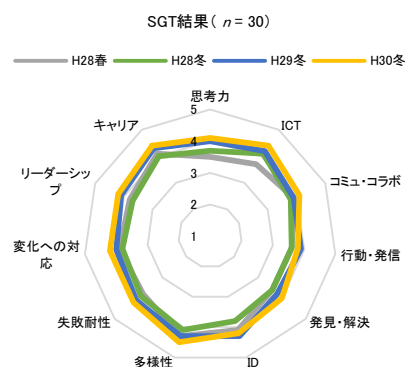


図3 国際クラス第3学年各因子の変化

- 7 (4) 【実践目標②】国内と海外でのフィールドワークを課題研究論文完成までに4回以上実施し、それらの実践的活動を通して、ローカルとグローバルを往還する視座を獲得させる。

国際クラス第2・第3学年の達成率は100%であり、第2学年は入学以降、平均して14.7回、第3学年は14.5回の実施となった。これらの活動は、生徒の社会課題に対する当事者意識の育成にも繋がっており、探究活動にも大きく作用している。

それを検証すべく、本年度末に、向上実感が得られた5S5M等の因子において、フィールドワークが影響を与えた割合を抽出した。結果、本年度はフィールドワークを行っていない第3学年では目立った結果は出ていないものの、本年度国内外で複数の調査を行った第2学年では、特に「失敗耐性」「探究意欲」「発見・解決」「コミュ・コラボ」の値が高く（図1）、海外の人や社会人を相手に失敗を繰り返しながら調査を行った様子が見られる。また、「ローカルとグローバルを往還する視座」を意識して学習を進めた結果、インドネシアでのフィールドワークをもとに、バリの観光開発の事例と名古屋における観光戦略を比較検討した生徒は、「第4回高校生国際シンポジウム」における口頭発表で優良賞を受賞した。こうした面からも、一連のフィールドワーク活動が「ローカルとグローバルを往還し、問題発見する力・課題を解決する力」を高める要素となっていることがわかる。

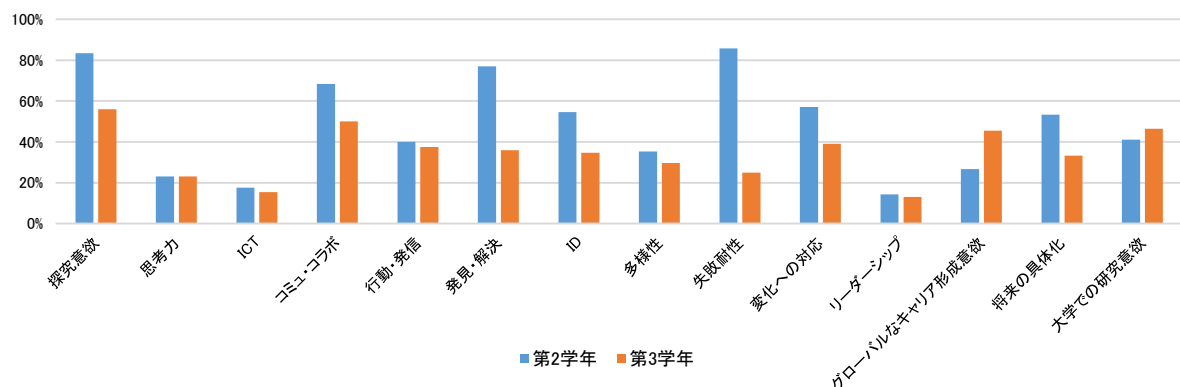


図1 フィールドワークが各因子の向上実感に影響を与えた割合（国際クラス）

7 (5) 【実践目標③】国内外の研修、大会及び社会活動に年間3回以上参加させる。

国内外の研修、大会及び社会活動に年間3回以上参加した生徒の割合は、国際クラス全体で92.0%（昨年度87%）であり、

表 国内外の研修、大会及び社会活動に参加した数

学 年	応募・参加数	1人あたりの平均参加数	目標達成割合
国際クラス第1学年	530	15.6	100%
国際クラス第2学年	322	14.9	100%
国際クラス第3学年	149	5.0	76.7%

国際クラス第1学年及び第2学年については昨年度と同様100%達成できた。第3学年の達成割合は76.7%にとどまったが、昨年度の56.8%に比べると大きく向上した。

上級生や意欲の高い数名が核となり、彼らが校外で積んだ経験を他の生徒が見聞きするうちに、次第に全体が影響を受けていく、というのが例年の形であったが、本年度の第1学年に関しては、早い時点から意欲的に動き、周囲を巻き込んでいく生徒が多く見られた。数値にもそれが表れており、全学年において研修や大会に参加する機運が定着してきている。

また、教員が率先して関わり、外部との人脈を構築したことも大きな成果である。

7 (6) 【実践目標④】プレゼンテーションを、国際クラスの生徒は年間12回以上実施する。

第1学年が17～20回、第2学年が16～24回、第3学年が18～23回実施し、全学年で達成できた（校外の実施分は含まず）。

例年通り、第1学年の「English Presentation」でプレゼンテーションの基本技能を段階的に指導し、その後の様々な発表時にはその理論を応用して実践しているが、それ以外にも上級生からの影響が少なくない。入学時に上級生によるガイダンス等を受けたり、上級生の研究発表を視聴したりすることを通して、早い段階からプレゼンテーションに対するモチベーション

を高めている。

一方、第3学年の生徒についても、下級生の前で発表することでよい影響が生まれている。第3学年の生徒を対象に3年間でついた力について書かせたところ、多くの生徒が「人前で自信をもって発表することができるようになった」、「人に教えたり、人の役に立ったりすることが楽しくなった」と答えていることから、自己肯定感の向上にも寄与していると考えられる。

他クラスにおいても年間に数回はプレゼンテーションを経験させることが定着してきており、全校を対象にした生徒研究発表会等で成果が共有されている。

以上の理由から、今後も上級生と下級生の学び合い、教え合いの機会を継続することが重要であり、そのために、各授業でそれぞれ行われるプレゼンテーションをある程度管理し、他学年の視聴ができるよう、担当者間の連携を進める調整役が必要である。

7 (7) 【実践目標⑤】卒業時における CEFR の B2 レベル到達率を国際クラスの生徒は 100% とする。

英検準1級、TOEIC Listening & Reading (以後、TOEIC L&R) 785 点をもって CEFR の B2 レベルと読み替える。結果として第3学年では英検で見ると、準1級合格率が20% (昨年度 43%) (図1)、TOEIC L & R の 785 点以上の取得率が8% (昨年度 35%) であった。昨年度に比較すると、どちらも低下しているが、本年度は授業の内外で「英語での発表」と「質疑応答」に力を入れて指導した。その成果もあって本年度は校外の研究大会において英語で発表する生徒が多かった。

英検2級で見ると、1名を除く97%が達成しており(図1)、TOEIC L & R のクラス平均スコアの推移を見ると、第1学年前期の326点から第3学年後期の620点へと294点伸びた(図2)。

昨年度の課題であった「即時的に英語で時事問題や社会問題等について話す」を克服するために、本年度は第3学年の「国際教養」(2単位)の授業で、統計データを用いながら、英語でエッセイを書いたり議論したりする活動を取り入れた。生徒たちは、データを批判的に捉えながら、英語で意見を表出することに慣れてきた様子である。現状の課題としては、少人数グループで議論を行

う際に、中心的に発言する生徒が限られてしまい、メンバー全員が十分に活発な意見を交わすことができていないことが挙げられる。議論に必要な各トピックの背景知識が不十分であることも考えられるが、日本語話者のクラスメイトと英語で会話をするためのマインドセットが身につけていないことも要因である。この課題は他学年においても同様であるため、今後は、英語での日常的な発話力を高めることに焦点を当てた活動を多く取り入れていく必要がある。そのために、Can Do リストを提示しつつ、B2 レベルの項目を基準として指導を進める。

表 本校教員が作成した Can Do リスト B2 レベル

話すこと (やり取り)	話すこと (発表)	聞くこと	読むこと	書くこと
時事問題や社会問題等について、即時的に自分の考えを論理的に述べることができる。	時事問題や社会課題等について、客観的事実と自分の考えを用い、聞き手に伝わるように工夫しながら、15分程度の発表をすることができる。また、質疑応答では即時的に質問者の質問に答えることができる。	時事問題等、幅広く社会に関係した内容についての情報や説明を聞いて、要点を正確に理解することができる。英語母語話者の演説を聞き取り、内容を理解することができる。	論理性のある説明文等を中心に専門的な分野の英文を初見で読んで、大筋の内容を正しく理解できる。自分の必要とする情報を英文の中から短い時間で的確に探しだすことができる。	時事問題等幅広く社会に関係した内容について自分の考えを論理的な段落構成を意識しながら、150語程度で書くことができる。

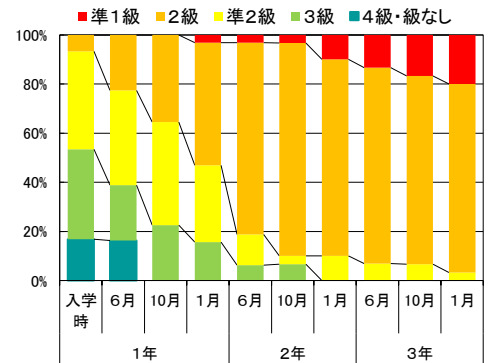


図1 英検取得率推移

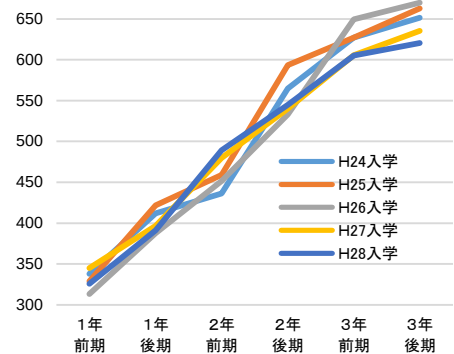


図2 TOEIC L&R スコア推移

7 (8) 【実践目標⑥】国際化を進める国内や海外の大学等，課題研究を生かした研究ができる大学へ進学する生徒を育成する。

国際クラス第 3 学年においては，スーパーグローバル大学創成支援事業の採択校（以下，SGU）である，上智大学，立教大学，立命館大学，関西学院大学等への進学が決定している。

「探究を深めることのできるグローバルな大学への進学意欲」と「グローバルなキャリア形成への意欲」について調査を行ったところ，意欲の高い（「非常に高い」と「高い」）生徒の割合は，「探究を深めることのできるグローバルな大学への進学」が，第 1 学年で 77%，第 2 学年では 83%，第 3 学年で 93%，「グローバルなキャリア形成」は，第 1 学年 76%，第 2 学年 65%，第 3 学年 73%で，キャリア形成はまだ不明であるものの，探究を深めることのできるグローバルな大学への進学意欲はより高まっていることが分かった。

これらの意欲を喚起した要素を調査したところ，「探究を深めることのできるグローバルな大学への進学」では「海外研修（80%）」，「探究型授業（78%）」，「語学力（49%）」，「フィールドワーク（47%）」の順で多く，「グローバルなキャリア形成」では，「海外研修（73%）」，「探究型授業（66%）」，「フィールドワーク（44%）」，「外部講師（42%）」の順で多かった（「海外研修」未実施の第 1 学年を除いた平均，他は全学年の平均で算出）。つまり，「グローバルな大学への進学意欲」「グローバルなキャリア形成への意欲」の向上のためには，探究型学習での学びとともに社会との接点を持たせることが必要である。

8 5 年間の研究開発を終えて

8 (1) 教育課程の研究開発の状況について

主対象である普通科国際クラスでは，第 3 年次から，第 3 学年と第 2 学年の「課題探究」を合同とし，研究領域別のゼミ制で実施している。これにより，学年を越えた生徒間での教え合い・学び合いを進め，授業内でも多様性への共感やリーダーシップへの意欲等，スキルやマインドセットを育成する仕組みを模索した。

第 3 年次からは，本校で最も規模の大きい普通科一般進学クラス第 1 学年に「探究基礎」，一般進学クラス文系第 2 学年に「グローバル概論」を導入し，第 4 年次には普通科一般進学クラス文系第 3 学年に選択制で「課題探究」を導入した。

8 (2) 高大接続の状況について

名城大学とは，授業，海外研修，研究発表，グローバルサロン，Meijo Global Festa 等の，講師派遣やプログラム開発において連携を深めてきた。特に当初は講師派遣を中心とした接続であったが，次第に探究活動や研究会での助言，海外研修のプログラム開発等，より深い接続ができるようになった。また，大学教員より各種学会の案内を受け，教員・生徒共に参加・発表する機会が増えており，本校教員の資質向上にも役立っている。

単位履修制度については，SGH 事業指定前に主対象クラスである国際クラスが，2004 年度～2013 年度まで名城大学人間学部の講義の履修・認定（6 単位分）を行っていたが，柔軟に運用できるよう，本校での授業に講師を招聘する形へと変更した経緯がある。結果として，大学教員及び学生の課題探究活動への参加は，指定前の 20 名から 189 名となり，様々な専門分野の講師を継続して招聘することができた。

表 課題研究と外部との連携

指標	指定前	1 年目	2 年目	3 年目	4 年目	5 年目	目標
課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ回数（人数×回数）	20	43	90	134	154	189	192
課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ回数（人数×回数）	8	49	141	168	173	175	35

8 (3) 生徒の変化について

・国際クラス入学生の変化

指定1年目の国際クラス入学生(36名)と、5年目となる本年度の入学生(34名)の4月時点のSGTを比較した(図1)。「コミュ・コラボ」や「行動・発信」については、SGH指定以前から当該クラスの特徴として広報していた因子であるため、変容は見られないが、「多様性(+1.0)」、「キャリア(+1.0)」、「リーダーシップ(+0.7)」、「ID(+0.5)」、「失敗耐性(+0.5)」、「発見・解決(+0.4)」は、上昇している。これは、本事業が認知され、意欲の高い生徒が入学していることが原因と推察される。

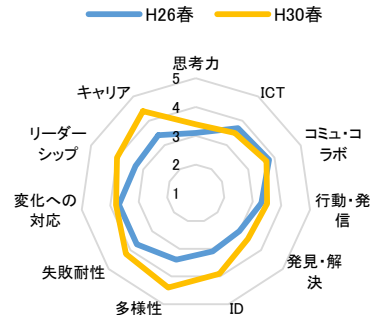


図1 指定後1年目の入学生と5年目の入学生の1年時春のSGT

・グローバルアクション カナダ研修参加生徒の変化(追跡調査)

昨年度のカナダ研修に参加した一般クラス第1学年の生徒(Yさん)のSGT結果を追跡したところ変容が見られた。

カナダ研修の参加者は全校から選抜されるが、昨年度は、当該生徒以外はSGH事業の主対象である国際クラスの第2,第3学年であった。すなわち、当該生徒は探究活動を日ごろから精力的に実施している上級生に交じって参加した状況にあった。結果、研修の事前に行ったSGTに比べ、事後は多くの因子が低い値を示し(図2)、リフレクションシートには、「自分の力不足を感じ、思うように行動できなかった」と悔しさが著されていた(第4年次の研究報告書p.33を参照)。

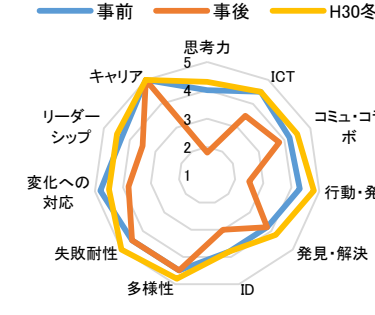


図2 カナダ研修参加者YさんのSGTの推移

帰国後、積極的に本校のSGH諸活動に参加するとともに、第2学年では授業「グローバル概論」での探究活動に取り組むなかで、本年度の1月にはほとんどの因子において、カナダ研修前の自信を取り戻し、さらに向上している様子が見て取れる。この結果は、本校のSGH事業の開発に一定の成果があったことを示している。

・生徒の学びの姿勢とキャリア意識の変化

第3学年が作成した「課題研究学びの軌跡」の以下の文面から、本稿での課題探究活動を元に大学での学びへの視点や課題を明確化させ、将来を具体化させている様子がうかがえる。

・以前は漠然としか将来を考えてなかったが、3年間の課題探究を通じた学習と経験を重ねるうち、教育の重要性和マイノリティへの支援の必要に目が向いた。課題探究ではマイノリティの子ども達の現状と課題を研究したことで、将来は子どもが抱える問題に携わりたいと考えている。そのため、大学では児童心理を研究し、留学などしてそれに関する先進的な研究を学びたい。(国際クラス第3学年)

・国際クラスで授業を受けているうちに、英語を話すことがゴールではなく、それをどう生かすかが重要であると感じた。さらに、海外研修などで他国の課題や現状に触れ、公民や課題探究などの授業で、貧困や移民、外国人労働など様々な題材について議論したり、発表したりしているうちに視野が広がり、英語圏だけでなくアジア地域に興味を持つようになった。そのため、大学ではアジア研究を先行することができる上智大学に進学し、アジアの文化や歴史を学び、日本の外国人労働者受け入れについて関わる仕事に就きたい。(国際クラス第3学年)

また、下表の通り、年度を経るごとに意欲が高まり活動が活発になる様子が見受けられる。

表 課題研究及びグローバルなキャリア形成への意欲(1~5は全校生徒を対象, 6は国際クラス生徒を対象)

指標	指定前	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	目標
1 自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数	50	97	90	99	89	118	120
2 自主的に留学又は海外研修に行く生徒数	33	21	27	47	53	62	30
3 課題研究に関する国外の研修参加者数	10	41	55	60	48	80	50
4 課題研究に関する国内の研修参加者数	20	78	74	89	90	102	120
5 グローバルな課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数	42	390	399	514	790	974	80
6 将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合	11.2%	80.8%	82.6%	87.9%	95.6%	95.4%	100%

8 (4) 教師の変化について

- ・総合的な学習の時間「課題探究」の担当者（5年間：実25名 延べ88名）の変化
 - ・大学での研究経験を生徒に還元することができた【社会】
 - ・改めて自分が大学での研究経験を振り返り、蓄積がなされていることを確認できた【社会】
 - ・5S5Mの各段階や習得の過程を分解して考え、実践することが、教科教育に対する考え方や指導法にも生かされた。【国語】
 - ・科目横断的な学習領域を指導することにより、技術のみを指導するOffJTの学習から、探究的視点を持ったOJTの学習に切り替える契機となった。【情報】
 - ・各教員それぞれの強みを生かせるとともに、その指導法を共有・学習できる機会となった。【複数】
 - ・教科指導だけでなく、育てたい生徒像やその資質について改めて考え、明確化した。【複数】

・関わる教員数の増加

本事業に際して中心的に機能している組織は、管理職が委員長となり組織する「SGH 実行委員会」、校務分掌として実働を担う「教育開発部」、総合的な学習の時間等、SGHの探究型授業を統括する「グローバル教科」、主対象である国際クラスの「担任団」の4つであるが、それらに関わる教員数は年々増えている（図1）。結果としてその割合は全専任教諭の39%となり、第1年次の18%から大きく伸びている。

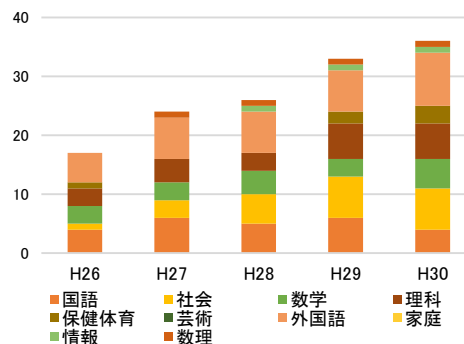


図1 SGH事業に関わる教員数

8 (5) 学校における他の要素の変化について（授業、保護者等の状況について）

・保護者の変化

SGH事業の主対象である国際クラスの第1学年の保護者にむけたアンケートによると、本校への進学理由に「本校独自のカリキュラム」を挙げた回答は、平成25年度時点は25%であったのに対し、平成27年度は41.4%、平成29年度は71.4%と飛躍的に上昇している（図1）。これは、中学校や保護者にもSGHの諸活動が浸透してきた結果と言える。

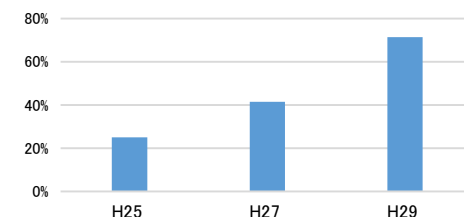


図1 「本校独自のカリキュラム」を進学理由と回答した保護者の割合(国際クラス)

・教育研究会等の開催

本年度は、「SGH 探究活動に関する研究会」と「教育研究会 2018」の2回、他校教員に向けた研究会を開催した。「SGH 探究活動に関する研究会」は9団体36名、「教育研究会 2018」は40団体97名の参加者を迎え、本校教員が実践報告・授業実践を行い、大学教員からの助言をもとに他校教員と協議する形式で実施した。

「教育研究会 2018」を主管したアクティブ・ラーニング研究会はSGH指定後の平成28年に組織され、「SSHやSGHでの探究活動での経験をいかしながら、学校全体として、通常の授業でも『主体的・対話的で深い学び』につなげられるようなアクティブ・ラーニングの視点を取り入れた授業を実施するよう研究を行う」ことを目的としている。これまで、他校教員を対象にした公開授業や実践報告を本校が主催したことはなかったが、これらの研究会では英語科・数学科・国語科・理科・社会科から合わせて12名が探究活動や授業内でのアクティブ・ラーニングの手法等について報告・発表を行うことができ、校内に、探究活動を重視し、各教科での展開を実践する基盤ができたといえる。

・生徒研究発表会の変化

本校ではSSHの指定を受けた平成18年度より「SSH 生徒研究発表会」を開催し、20年度からは、「生徒研究発表会」と改称して全校生徒の研究発表の場を設定している。SGH指定前までは、SSHの研究発表を軸に、国際クラスの課題研究、総合学科の活動と発表の枠を広げて

きたが、SGH 指定後は更に一般進学クラス文系や特別進学クラス等、発表を行うクラス・コースが広がっている。これは SSH とともに SGH が本校の探究活動の軸となり、全校規模での探究活動が行われつつあることを示している。

8 (6) 課題や問題点について

・校内・他校への成果の普及の不足

「Meijo Global Festa」, 「SGH 探究活動に関する研究会」, 「教育研究会 2018」などにより、本校の体系的な教育課程や PBL の教育課程の普及を目指してきたが、十分であったか、という点が課題である。

校内、他校への普及のポイントは協働である。教員・生徒とも協働の有効性については理解できている。研究実践目標②④の成果・評価、今後の改善点であげたように、プレゼン作成、発表において上級生・下級生の学び合い、教え合いの機会が重要であること、研修・大会において意欲ある上級生から下級生に良い影響あること、フィールドワークについて教員が情報共有し、生徒の指導にあたる体制作りの重要性が挙げられている。他校との協働についても、Meijo Global Festa での他校生徒との議論・協働の有効性が指摘されている。

・「自ら新たなネットワークを構築する経験」の創出における指導・支援の在り方

グローバルシチズンシップの獲得に向けて、本事業では、生徒たちの A「世界の現状と課題に触れる経験」、B「自らの意見を発表し、他者と対話・議論する経験」、C「自ら新たなネットワークを構築する経験」を重視してきた。A・B については、ある程度達成できたが、C については、意欲はあるものの、ネットワーク構築に向けて動き出した生徒がいる段階である。

本校では、課題解決に向けた活動として、ボランティア活動やアドボカシー活動等に取り組むとしている（前述「スーパーグローバルの構想の概要」p.3 を参照）。それらやフィールドワークを通して、生徒たちが課題を「自分ごと」と捉えることができるようになってきたことから、C「自ら新たなネットワークを構築する経験」をどう作り出していくかが課題と言える。

・高大連携・産学協働のための部署（組織）の整備

SGH 担当教員の個人的な働きかけのなかで、それぞれ連携、協働を図ってきた部分が大きかったことは否めない。組織的な連携、協働を推進する部署が整備され、活発化すれば、授業に大学教員や企業、県、NPO などとの協働による授業、諸活動をより機能的に設計できたのではないかと考える。

・外部人材（総合アドバイザー、コーディネーター）の必要

運営指導委員会を年 2 回開催し、指導委員からの助言を生かし、本校のプログラムの見直しを図ってきたが、大きく変化する社会情勢の中では、スピード感のあるプログラムの改変、取捨選択が必要である。研究開発の概要にある高大連携、産学協働の探究活動等を進展させるためには、本校の研究開発を総合的に見る外部人材（総合アドバイザー）が必要であったかもしれない。

8 (7) 今後の持続可能性について

本校及び管理機関は SGH 事業の有用性を認めており、SGH 指定期間終了後も継続して事業運営を行うことを決定した。したがって、海外研修の一部は修正する必要があるものの、国内での探究活動・発表活動等は従来通り継続し、主対象である普通科国際クラスだけでなく、普通科一般進学クラス、普通科特別進学クラス、総合学科と、全校規模で探究活動を深め、本校の教育の大きな軸とする。そのため、今後は SGH 事業から「Liberal Arts Meijo Program : LAMP」（仮称）へと名称を変更して、校務分掌の教育開発部を中心に探究活動を推進してことが検討されている。

【担当者】

担当課	教育開発部	T E L	052-481-7436
氏 名	羽石優子	F A X	052-481-9400
職 名	教諭（教育開発副部長）	e-mail	haneishiy@meijo-h.ed.jp